



津田永忠と百間川の河口堰

東日本建設業保証株式会社
建設産業図書館
江口知秀
Tomohide Eguchi

古 宮神社の前から再び百間川の堤防にのぼると、河口水門が遠くに見えた。川ではボートの練習をしている。神社のすぐ向こうに岡山大学ボート部の建物があったから、その学生か。河原の眺めとしてはちょうどいいし、一服していくことにした。

この百間川は、旭川の洪水から城下を守るための放水路として造られ、沖新田の開発にともない地域の排水機能を一手に担うこととなった。付近の小河川を合流させ、一、五四〇町歩もの広大な沖新田を東西に分けて中央を南流し、児島湾へと至る大排水路となったのだ。

しかし、ひとつ大きな問題があった。児島湾へ排水するのはいいが、満潮時には海水が逆流するし、高潮がおきれば新田が潮でやられてしまう。これを防ぐためには河口堰で児島湾から百間川を締め切る必要があった。そうして生み出されたのが、当時の土木技術の粋を集めた大水尾と河口堰に設けられた排水樋門だった。

まず大水尾とは百間川の河口付近を広げて造られた貯水池のことであり、百間川の水を一時的に貯め込む役割をする。なので、なるべく湛水面積を大きくするために百間川の河口部はラップのように開いており、現在の地図でも形を確認できる。児島湾の

満潮時には逆流を防ぐために排水樋門を閉じて、百間川からの水を大水尾に貯め込み、干潮になって海水が引くのを待ってから樋門を開け、水位差を利用して排水する。

いたって簡単な仕組みのようだが、自然を知り尽くし、それを巧みに利用して、当時の限られた技術で立派な河口堰を実現させたのだ。そして元禄五（二六九）年の完成から二七〇年もの長き間、樋門の改良や増設などが加えられ、時には台風による高潮の浸入を許したものの、昭和四十三（一九六八）年に鋼製ローラーゲートの水門に変わるまで、江戸時代初期から現役であり続けた。ちなみに、この時に取り除かれた排水樋門の石材を用いて、現在の岡山市北区表町二丁目の市電通りに、永忠が元禄四年から宝永元（一七〇四）年まで住んだ居宅跡の碑が建てられている。

さて、そろそろ河口水門へと向かおう。たぶん水門の上は通行できるようになっているだろうから、左岸に渡って大水尾のラップの部分造るために積んだ石垣の遺構を見物することにした。

現在の河口水門は昭和四十三年の水門に加え、平成二十七年にはライジングセクターゲートの水門が増設されている。その上は車道になっているが、狭

い一車線で信号もなく、対向車同士が確認し合いながら代わる代わる通行するので、対面から来られた時はかなり恐ろしく、ヒヤヒヤしながら渡った。

そうして左岸堤防の上から石垣の遺構を見ることができたが、ほとんど人が通らず、遺構も知る人ぞ知る存在だ。まあ、たとえ人通りが多かったとしても、城の石垣のように目立つものではないので、貴重な遺構だとは思わないだろうが。



現在の百間川の河口水門
手前がローラーゲート、
向こうがライジングセクターゲート

〔交通〕古宮神社から自転車です約10分